

## 呉王朝の復活を目指した卑弥呼

九州古代史研究会主宰 多元的古代会員 内倉武久

### ◇卑弥呼は何時、どこにいたか

日本の古代史の上で最も有名な女帝、という「卑弥呼」はどういう系統の人で、本名を何と言ひ、何時、どこにいたのか。まずこの事をはっきりさせなければ話は始まらない。多くの古代史家はこの問題をあいまいにすることで、市民にいかがわしく、事実と違う古代史を流布してきた。

卑弥呼の事を若干詳しく知ることができるのは、まず、ご存じの通り中国の史書『三国志・魏書・倭人伝』だ。この史書で最初に言うておかなければならないのは「倭」という文字は決して「わ」と読んではいけないことだ。当時の字の意味や発音を記録した『説文解字』に記録されている（拙著『卑弥呼と神武が明かす古代』参照）。

### ◇「倭」は「わ」でなく「𐤎 (い)」と読むべし

「わ」という発音は中国南方の呉音の発音であり、北方で書かれて読まれた漢音地域では「𐤎 (u w i)」という発音しかなかった。「わ (u w a :)」という呉音が漢音地域に入り込んだのは10世紀ごろ以降のことである。

だから『魏志倭人伝』の記述を正しく理解するためには字の発音はすべて、まず「漢音」で読まなければならない。初めて「倭」を「わ」と読むように指導した旧東京帝大の三宅米吉は国文学者であり、中国の発音には暗かったことも一因だろう。「奴」も「ナ」ではなく「d o = ド・ト = 戸、門」であり、『魏志』に記載されたふたつの「奴国」は室見川河口の「山門 (やまど)」と、筑後川河口の「山門」がこれにあたりと考えられる。

古田武彦先生は「卑弥呼」を「ひみか」と読むよう主張していたが、小生は賛成できない。「ヒミコの時代」はもう「カメ棺の時代」ではないし、「卑弥呼の墓」は、『倭人伝』による限り径100歩の円墳、或は円墳に祭りの場である方形基壇をつけた前方後円墳と思われるからでもある。「日の御子」あるいは「日の巫女」であろう。

### ◇出身さぐる資料に「松の連・姫氏」系図

江戸時代中期の国内外の伝説をつづった和田長三郎らの『和田家文書・東日流六郡史』などによると、「卑弥呼」が生まれたのは「伊川」という所だという。「伊川」は、九州では北九州市門司区や飯塚市に地名が残っている。だが、この「卑弥呼」は魏志にいう「卑弥呼」ではないらしい。当時の日本列島には「日の御子」「日の巫女」はそれぞれの勢力(国)のトップとして大勢いたと考えられる。「和田家文書」にいう「卑弥呼」は、子供がおり、鐘洞窟の中で死んだというから、おそらく九州北東部に君臨していた「日の御子」だろう。

日本列島と朝鮮半島の関係を誤解している研究者のなかには、卑弥呼の一族は公孫淵氏らの流れを汲んだ朝鮮族だと考える人もいる。が、これは次の『晋書』の記事を誤読した結果であって間違いだ。

『晋書』倭人伝 「漢末、倭人乱。攻伐不定。乃立女子為王。名曰卑弥呼。宣帝之平公孫氏也、卑弥呼遣使、至帶方」

この「也」は「～である」の「なり」ではなく、「～するやいなや」の「や」である。「宣帝（司馬懿）が公孫氏を平らげるや否や、卑弥呼は魏に使者を送った」という意味である。古田先生が指摘したように、『魏志』の「卑弥呼、景初二（239）年遣使」説が正しいと考える。

#### ◇卑弥呼の本名は「姫の刀良」

小生が最も注目しているのは、東京・静嘉堂文庫や国会図書館所蔵本に保管、記載されている「松野連・姫氏（マツのむらじ・きし）」系図の記載である。

系図の松氏と姫氏は、名前は違うが同じ一族である。「野」は元来接続詞で、後に名前の一部になったらしい。その姫氏がなぜ松氏かという点、姫氏は『記紀』ではそれぞれ「木」「紀」と書かれている。そして木（紀）氏は「日本列島の覇者」として「木の公（きみ）」と呼ばれていた。それで「木」と「公」が合体して「松」氏と表現されるようになったという。

『魏略逸文』や『晋書』など中国史書には、「倭人は自ら『我々は太伯の子孫である』とやっている」と繰り返し述べられている。『新撰姓氏録』では松野氏は「出自は（太伯の裔）呉王夫差である」と記されている。

紀元前 12 世紀ごろ、周王朝（姫姓）の王子であった太伯はお世継ぎに選ばれず、弟とともに南に逃げ、長江下流・江蘇省辺りに「呉（勾呉）国」を創建。夫差は呉国の最後の王で紀元前 478 年、隣の越王・勾踐によって滅ぼされ、自殺したという（『史記・太伯世家』『呉越春秋』など）。

静嘉堂文庫所蔵系図に拠れば、夫差から数えて 17 代目ごろの「刀良（とら）」という女性を「卑弥呼」と呼んだ、と特記している。つまり卑弥呼の本名は「姫の刀良」であろう。

#### ◇紀氏一族・卑弥呼は熊本の菊池が本貫地

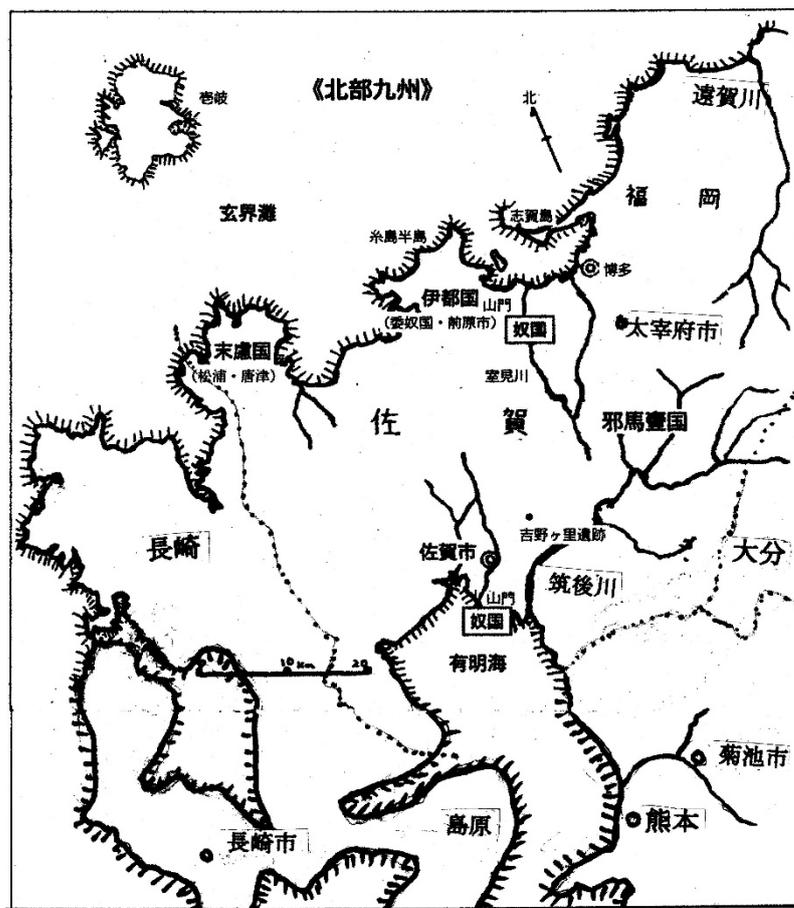
系図によると、夫差が自殺した時、一部の皇子や取り巻き人らは船に飛び乗って逃げ、黒潮に乗って列島に到着（『通鑑前編』）。とりあえず熊本県菊池市の「山門」に落ち着いたという。『倭名抄』に記載のある「山門（やまと）」だ。彼らはここを拠点にし、そこから九州北部一帯に進出したという。

であるから、『魏志』にいう卑弥呼は福岡県とか佐賀県辺りにいたと考えられる。

注目されるのは、九州歴史資料館が 2001 年ごろ実施した太宰府に付属する防衛施設「水城」の C<sup>14</sup> 年代測定値である。11 層あった堤の補強材・敷ソダを測定した。それによると最上部は 660 年±、中層部が 430 年±、最下部は何と 240 年±であった。

#### ◇太宰府は卑弥呼が建設し始めた

要するに「太宰府」は現在言われているような「7 世紀後半の建設」ではなく「卑弥呼時代に建設が始まった都市」だったのだ。



その可能性はあるのだろうか。「太宰」は中国では殷代から存在した伝統の官位で、周もこれに倣っていた。『史記』や『呉越春秋』に、「夫差が(部下の)伯嚭を太宰に任じた」という記事がある。太伯は周の皇子であったから、取り巻きの官僚たちも周の制度を踏襲したのであろう。周の制度の中に「太宰(たいざい)」があり、勾呉国もそれを踏襲していたことがわかる。「太宰」は国家の総理大臣格の職務である。

「倭人伝(いじんでん)」の記載から考えれば、AD1世紀当時、北部九州を席卷していたのはニギらが創設した「伊都(倭奴)国」であった。「倭国(いこく)の大乱」の結果、「邪馬壹(いっ)国」の卑弥呼らが伊都国から支配権を奪ったと考えられる。

その卑弥呼勢力が造った可能性が高い都城に「太宰府」という名称を与えたのも「太伯を祖と仰ぐ倭人(いいのひと)」卑弥呼らである可能性が高い。卑弥呼は、自身を宗主国と仰ぐ「魏」の宰相格の人間であるとへりくだり、位置づけして自ら拠点にした。或は卑弥呼自身を「親魏倭(いい)王」とし、部下の誰か、例えば難升米(ダン シュクマイ=団淑舞、或は壇淑舞、或は段淑舞)を政権の「太宰」に任命して、その役所(府)とした、ことなどが考えられよう。

#### ◇「大率」「大夫」も周の制度

『倭人伝』で邪馬壹国が設けたという制度のなかに「一大率(いっだいそつ)」がある。周の制度に「大率(卒)」がある。天子直属の軍隊で、日本でいうなら近衛兵だ。周の制度では「大率」は「兵車350乗、士卒二万六千二百五十人、勇士三千人」で組織されたという。

この「大率」に邪馬壹国の「壹」、すなわち「一」をつけて、「卑弥呼直属の軍隊」を組織したことが考えられる。

「大夫」も周から呉に続く国家の制度にある。「大夫」は邪馬壹国以前の伊都(倭奴)国

時代からあったと記録されている。ニニギ一統が作ったという「伊都（倭奴）国政権」に参加していた紀氏・卑弥呼勢力が影響を及ぼしたのかもしれない。もちろん卑弥呼政権でも上級官僚をそう呼んでいたという。

#### ◇吉野ケ里に「明堂」があった

紀氏一族が菊池市の山門から北部九州に進出する途中に佐賀県神埼町がある。ここの吉野ケ里遺跡に、周やその後の中国王朝が権威の象徴とした建築物「明堂（めいどう）」が造られていた。遺跡内の「北内郭」がそれである（拙著『卑弥呼と神武が明かす古代』）。

「明堂」は東西南北4本ずつ、計16本の柱で造られ、出来上がった9室のそれぞれに祖先を祭る部屋、太陽や月を祭る部屋、忠誠誓言室など国家の重要な9つの政治（まつりごと）を担わせた（『史記・封禅書第六』）。針きゅう診療の「ツボ」を表す「明堂」はここからきている。

「北内郭」の中心建物は「夏至の日の日の出」と「冬至の日の日の入り」場所を結ぶ線と、南北の線の交点に、ぴたりと合わせ、柱16本で造られている（吉野ケ里遺跡整備調査報告書）。周囲に馬蹄形の二重濠を巡らせて水を貯めるなど「明堂」の制にあっている。『晋書・武帝紀』に「南北の郊に合わせ『二至の祭り』をした」と記されている。遺跡の「北内郭」と祭りの場であった「南内郭」のことであろう。

#### ◇卑弥呼政権は幕府のような存在

ちょっと注意しないといけないのは、いわゆる「卑弥呼政権」は独立した国家ではなく、事実上の支配者ではあったのだろうが、名目上の支配者、すなわち宗主国は相変わらず「伊都（倭奴）国」であつたらしいということだ。

「一大率」など主要な組織は太宰府や吉野ケ里には置かれておらず、伊都（倭奴）国の都である糸島市前原に拠点を置いていたと『倭人伝』は記している。卑弥呼が魏から下賜された金印の国名も「邪馬壹国」でなく、「親魏倭王」、すなわち「倭（半）国」と表記されている。

卑弥呼らはいわば後の「幕府」のような存在であつたらう。しかし魏国は、卑弥呼ら「紀氏勢力」を独立した国家の如く描き、朝鮮半島からさらに海を越えた「へき地」から使いを送って臣下の礼をとった卑弥呼らを「女王」と位置づけして、「こんなに遠い国からも挨拶に来た」と、史書の中でも自らの国の威勢を示したかったのではないだろうか。「紀氏・卑弥呼勢力」は一時的には強敵・熊曾於族の大国（狗奴国＝コウドコク）の軍門に下つたとみられ、卑弥呼時代はいったん壹與の時で終止符を打たれたと考えられる。（図は北部九州の卑弥呼関係図）